

市民と共に、市民が育む、新世代のシティホールを創る ～新しい平川市の象徴となる町の活性化拠点～

三町村統合により生まれた新しい平川市。市域は拡大しましたが、「平川ねぶた」に代表されるように、市民の活動には平賀地区はもちろん、尾上地区や碓ヶ関地区からも大勢が参加してきました。平川市新本庁舎を提案するにあたり、今まで以上に、市民が力を合わせたコミュニティ活動をさらに発展させたいと思います。新庁舎には、これまで分庁舎で営まれていた行政サービスを集約し、市民サービスを向上させるとともに、地域に分散していたまちづくりの活動拠点を統合する、新世代の市民活動の絵舞台としての「コミュニティ＝シティホール」を創りましょう。市民と行政、専門家が共に平川市の暮らしを考え、互いに学び、育て合う、協働の舞台としての庁舎づくりを提案します。

i - i) 設計業務の進め方(取組方針、品質確保など)

01 平川の風土に根ざし、市民と共に創る「コミュニティ庁舎」
豊かな田園風景と共にある平川の気候風土を活かし、屋外の広場と庁舎内の空間が一体となった、伸びやかな市庁舎をつくります。冬場の強い季節風や、雨天・降雪時に配慮して、庁舎内外をつなぐ境界部にはピロティによる大きな軒下空間も生み出します。現在の平川市には、中心街の賑わいの創出、コミュニティの活性化が求められていますが、市民と共に新庁舎を計画することを通して、自然に市民コミュニティの醸成が図れるような設計業務の進め方を考えます。

02 日常的に市民が憩い、市民が育む「市民の広場」

市庁舎は商店街の中心に位置し、「ねぶた祭り」の出发点になっています。屋外の広場は尾上の造園技術を活かした豊かな生垣に囲まれ、思わず立ち寄りたくなるような公園として整備します。軒下は雨宿りや夏場の日除けの場所ともなり、同階にある庁舎の市民ホールも含めて市民の日常的な憩いの場となるよう、市民と「ここで何ができるか・何がしたいか」を話し合い、地域の祭りや納涼会ほかのイベントにも役立つ「市民の広場」をつくりましょう。

03 ユニバーサル、フレキシブルで、ながく親しまれる高品質な庁舎

庁舎内には、市民ホール、市民展示スペース、打合せ・休憩スペース、カフェの設置や会議室・議場の開放など、随所に市民が利用できるスペースを設けます。これらすべてが、子供からお年寄り、体の不自由な方まで万人が安心して利用できるよう、ユニバーサルデザインを徹底します。また、人口減少社会にあって、将来の機能変化にも対応できるよう、柔軟性を持った建築計画、建築の長寿命化や品質確保を実現するために、設計段階で材料・工法・性能・サステナビリティなどの綿密な検討を行うことで、維持管理が容易で、ライフサイクルコストも安価な庁舎をつくります。

i - ii) 業務の取組体制、設計チームの特徴(協力体制・業務分担体制等)

04 デザイン提案に優れた建築家と、風土をよく知る地元の建築家の協働

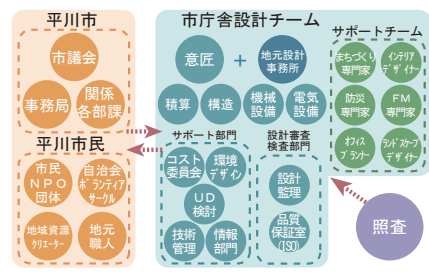
長年にわたって東北地方の住宅賞の審査を務めたほか、自ら東北地方・北海道・ロシア沿海地方での設計も手掛ける、国内外で活躍する建築家と、青森の気候風土や文化、雪対策などに精通した地元の建築家らが協働し、互いの豊富な経験と10年来の交友を活かして設計に臨みます。

05 中心市街地に、市民協働を促進するデザインオフィスを開設

平川市の中心市街地に、行政担当者との迅速な連絡や協議をはじめ、設計のプロセスを展示するなど、市民への情報発信のためのサテライト・デザインオフィスを開設します。庁舎づくりに関心を持つ市民の皆さんとのコミュニケーションの場として活用します。

06 経験豊富なエンジニアを起用し、市民・行政との円滑なコミュニケーションを

管理技術者を筆頭に、意匠・構造・電気・機械設備・外構の各技術者には、いずれも同種建物の設計経験が豊富で、マネジメントやコミュニケーション力に秀でた人材を登用し、市民や行政との緊密な意思の疎通、相互理解をもって業務を進めてまいります。



外観イメージ図1

ii) 基本計画の課題とその実施方針

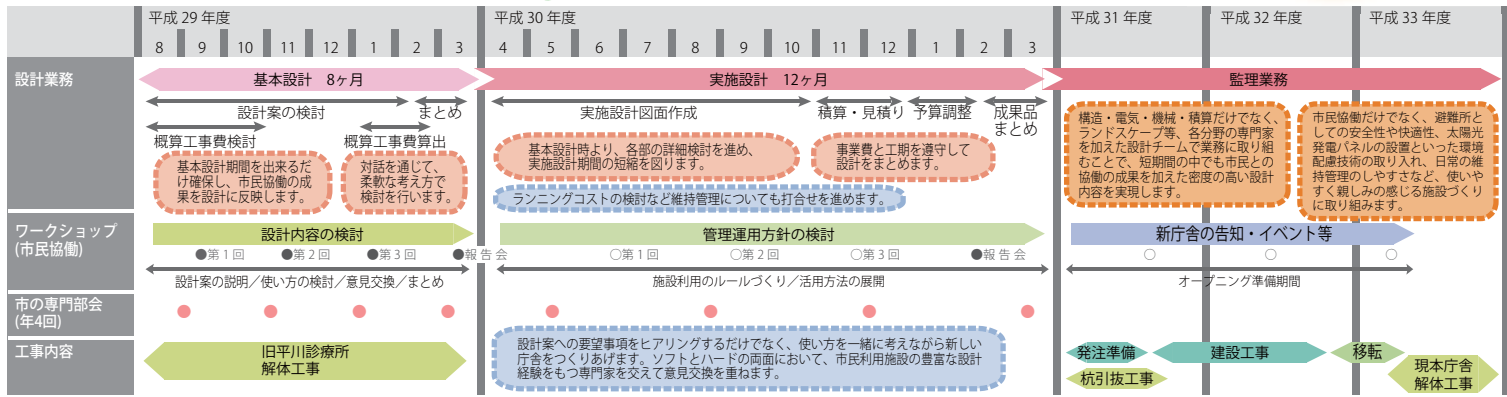
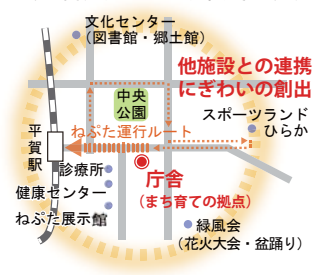
07 平賀・尾上・碓ヶ関、平川市三地区の統合・連携の拠点づくり

現在の平川市には平賀・尾上・碓ヶ関の三地区があり、本庁舎のほかに尾上・碓ヶ関・葛川に三つの支所があります。新本庁舎からはそれら方向を眺望でき、視覚的にそれらを結ぶほか、三地区が連携する活動の拠点となることによって、文字どおり統合の拠点として機能します。また、デジタル・サイネージなどを活用して、生活情報、観光情報、防災情報などを誰の目にも分かりやすく提供します。



08 交通の拠点、商店街、コンパクトな町の好立地を活かした町づくり・まち育ての起点となる庁舎

計画地は平賀駅のすぐ近くに位置し、利便性の高い位置にあります。平賀駅は弘南鉄道が通り、市内循環バスの発着点であり、市民の交通の拠点です。庁舎周辺には、文化ホール、スポーツランド、健康センター、診療所、ねぶた展示館などがコンパクトに配置され、庁舎前を出発点とし、ねぶたまつりが運行されます。これら好立地であるメリットを活かし、他施設との連携、交通機関との連携を進展させ、街のにぎわいの創出、まち育ての拠点となる新庁舎を提案します。



iii - i) 特に重視する設計上(意匠・構造・設備の各分野)の配慮事項

09 上下二段の敷地を、ひと繋がりに結ぶランドスケープデザイン

現況敷地は大きく二段に分断され、階段で行き来する不便な状態にあります。本計画では、敷地全体を緩やかな傾斜でつなぐ大きな敷地にすることで、ひとつながりの大きな広場を形成します。庁舎内の市民ホールは広場につながり、広場は町とつながり、さらに周囲の田園にもつながることで、緑豊かな広々とした丘、市民はもとより外からの来訪者にとっても、親しみのある平川市の象徴となる広場です。

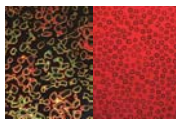
10 風土の知恵に学び、平川の春夏秋冬と共に暮らす

津軽地方には冬の積雪や夏の日差しを遮る「こみせ(雁木)」の文化があります。本計画においても「こみせ」の知恵を取り入れ、出入口は大きな軒下にとり、市民や建物を降雨・降雪から守ります。特に広場とつながる「グランドフロア＝0階(市民ホール階)」の大きな軒下空間は、雨天時などにも活用できるほか、災害発生時には救援活動スペースとしても有効に利用できます。また庁内の各階から“津軽富士”と呼ばれる岩木山や、八甲田山の方向を見晴らし、津軽平野の広がりを感じ取れる庁舎とします。



11 郷土の歴史文化を継承し、未ながく愛され続ける庁舎

古来からこの地方では、津軽塗、こぎん刺し(南津軽郡では東こぎん)などが親しまれてきました。市役所カウンターやサイン計画、象徴的な壁面などに、これらの素材やパターンを利用して、郷土の歴史を感じる庁舎建築を演出します。また、尾上地区には手入れの行き届いた生垣の町並みや、盛美園、猿賀公園などの庭園があります。本庁舎前の広場でも、それらの職人技術によって作り出される郷土のランドスケープのモチーフを活かして、周辺環境とも調和した美しい景観を創り出します。



12 地場産材、地元の技術を活用して、地元が育む建築

青森ヒバやスギなどの、この地域で多用されている地場産木材を最大限に使用し、また、地元の大工技術や加工技術を積極的に活用して、木のぬくもりを感じ、同時に郷土の技術を感じさせる、地元市民に未長く愛され、初めてきた来訪者にも親しみやすさを感じさせる、やさしく柔らかい市庁舎建築のイメージを生み出します。

iii - ii) その他の業務実施上の配慮事項等

13 平川市の若者男女と協働する、庁舎づくり市民ワークショップ

私たちはこれまでも、多くの庁舎建築、公共ホール、図書館、美術館、学校などの公共施設づくりの機会に、毎回多くの市民との協働作業、ワークショップを企画・実行してきました。市民による市民が育む新しい世代の市庁舎の実現のために、本計画においても、多様な世代の市民が参加する創造的な市民ワークショップを提案します。

14 若者や中高生がまちづくりに参加し、平川の未来を共に構想する

中でも地元の中学・高校生をはじめとする多くの若者たちの情熱とアイデアを、是非取り入れたいと考えます。すでに東北地方のまちづくりや、九州地方の公共ホールづくり、山陰地方の地域活性化事業などにおいて、多くの中高生たちと協働して成果を上げた実績があります。新しい時代の平川市を構想する重要なメンバーを養成します。

15 設計での市民参加、開庁後の市民サービスの担い手づくりにつながる

公共施設建設の機会は、世代を超えた多様な市民の皆さんが手を取り合って協働する、とても大きなチャンスです。設計段階での市民の参加は、オープン後の庁舎への愛着を増やすことはもちろんですが、今後ますます必要とされる市民自身による市民サービスの担い手、市民サポーターの育成につながります。

新世代の庁舎、新世代の行政サービス、ミライの市民生活を考える ~市民と共に、市民が育む、新世代のシティホールを創る~

01 敷地のポテンシャルを最大化する平面計画

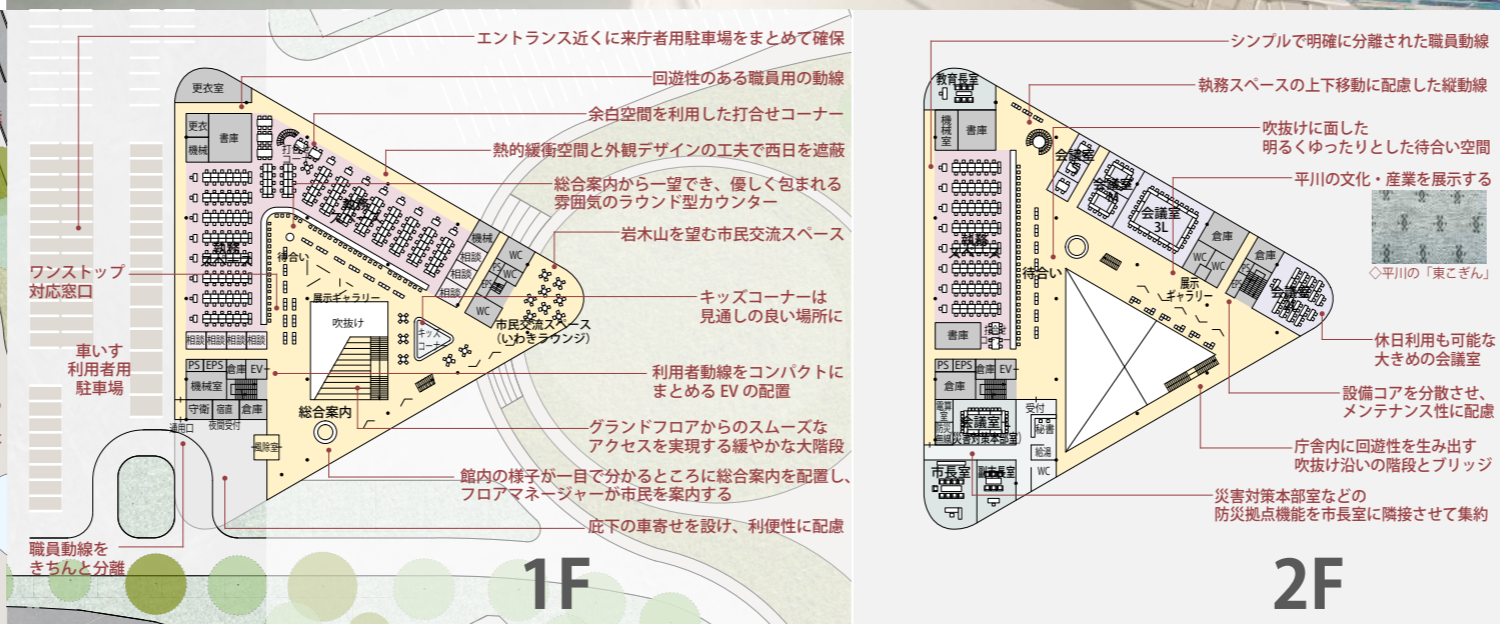
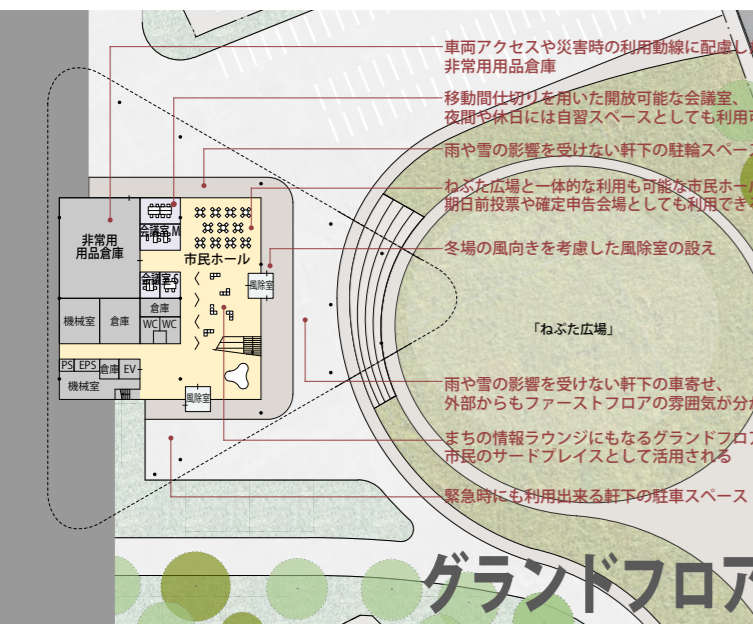
高低差があり、不定形なこの敷地に対し、市民が利用しやすい駐車場を効率よく配置し、これを町や商店街につながる広場や庭園ともスムーズにつなぐために、その扇の要となる位置に、角を曲線で丸めた三角形の庁舎プランを提案します。フロアを中心に上階に向かって未広がり吹抜けをとり、またメインロビーのあるファーストフロアと下階のグランドフロアを、観覧席のような緩勾配の大階段で結び、庁舎の中でも駐車場レベルと広場レベルをつなぎます。もちろん大階段は様々なイベントにも利用可能です。三角形の平面は市民関連の窓口を集約する上でも、また関連する機能を連携させる上でも、互いに至近の距離に配置することが可能で、吹抜け回りの動線も短く、各階平面をコンパクト化できます。三角形の隅部からは、西北西に岩木山、東北東に八甲田山の方向を望むことができ、各階から市内三地域の広がりと共に、津軽平野全体の広がりを実感することができます。



「市民を優しく迎え入れ、快適に過ごしながらサービスを受けることができる窓口空間の工夫」についての提案

02 みんなに優しい新世代の窓口業務を見据えて

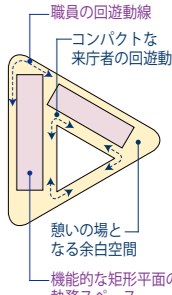
オンライン技術が発達し、従来の多くの行政手続きが、直接窓口に行かなくても可能になっています。今後ますますその傾向が加速される中、新世代の市庁舎には、市民が職員や他の人々と直接出会い、フェイス・トゥ・フェイスの相談やコンタクトができる場としての機能が求められます。特に市民に関係の深い窓口の並ぶメインロビーは、将来的には、現在のワンストップ・サービスをさらに一歩前進させた、ロビー全体をラウンジ化して、関連する職員が市民とテーブルを囲む形の「オフィス・ランドスケープ型」に移行することも考えられます。本計画では各分野の専門家と共に、こうした将来像への段階的移行を見据えた検討を行います。エントランスに総合案内を設け、まち育てと連動してフロアマネージャーが館内を誘導し、ワンストップ窓口やプライバシーに配慮した相談室、各階の市民活動エリアなどに案内します。グランドフロアからの来庁者に対しても、カメラモニタによる確認などの手法を用いて速やかな対応を実現します。



「機能的な執務環境と効率的な市民サービス提供」についての提案

03 矩形の業務エリアと、憩いの場となる余白空間

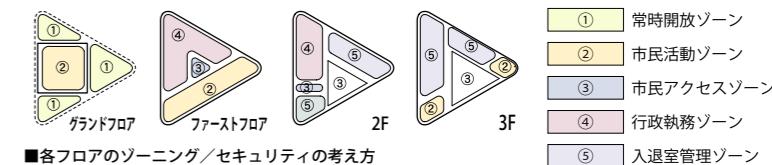
主要な執務空間は将来の可変性を担保する無柱のワンルームの空間として、効率がよく配置の互換性が高い矩形平面のエリアに置き、三角形平面を活かして各所に生まれる剰余の空間を、開放的な打合せコーナーや休憩ラウンジ、展示ギャラリー等として、随所で市民や職員が交流、リフレッシュできるゆとりの場所として活用します。庁舎内での「硬」・「軟」両空間の組み合わせが、業務空間に緩急をつけ、メリハリの効いた快適な執務環境を生みだします。



「日頃から市民が気軽に立ち寄れるような空間のあり方」についての提案

04 市民ホールの土休日、夜間の市民開放を可能にする明快なセキュリティ計画

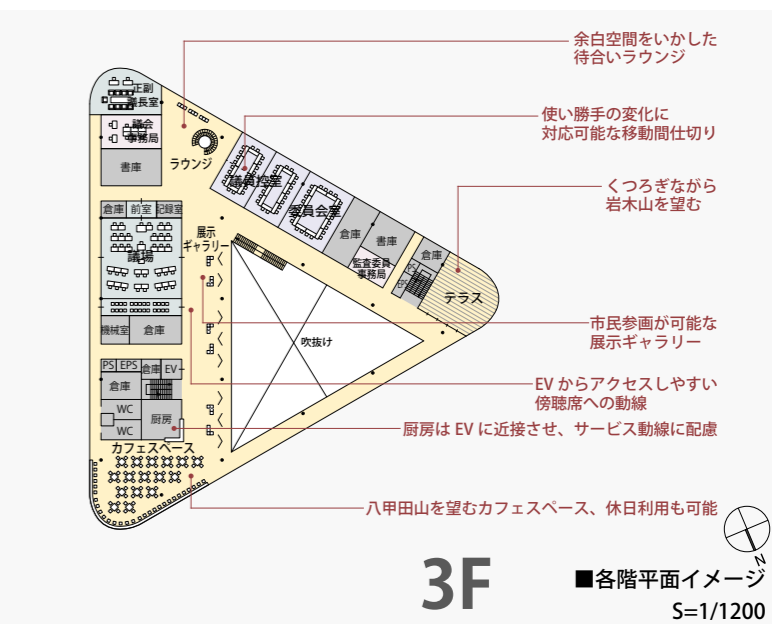
共に接地階となる、広場につながる「グランドフロア=0階(市民ホール階)」と、北側駐車場や車寄せに接続する「ファーストフロア=1階(市役所メインロビー階)」を、明快なセキュリティラインによって区分することで、通常は一体としてつながるそれぞれの階を、必要に応じて切り離して利用可能にします。これにより閉庁時にも市民開放ゾーンを利用することができます。また、庁舎内を「①軒下ピロティ部など常時開放ゾーン」から、「②市民ホールなど市民活動ゾーン」、「③開庁時市民アクセスゾーン」、「④個人情報などを扱う行政執務ゾーン」、「⑤市長室ほか特別職、議会関係などの入室管理ゾーン」まで、各段階に応じたセキュリティの確保を行うことで、共用部の積極的な市民開放を可能にします。グランドフロアに「ねぶた広場」と一体利用可能な市民サロンを設け、365日、いつでも賑わいにあふれる場所づくりを目指します。



「防災拠点として必要な機能整備と構造に関する考え」についての提案

05 市民の安心の拠点となる、あらゆる災害に強い庁舎

免震構造を採用して、地震動に強く、大地震後も速やかに業務を再開できる庁舎とします。非構造部材、設備機器等の耐震性を確保し、災害時にも有効にバックアップされる設備システムを構築します。風水害の恐れのない2階に市長室を置き、隣接して災害対策本部室を配置し、緊急時の速やかな対応を可能にします。接地階に非常用用品倉庫を整備し、災害時の市民サービスに備えるほか、日射を遮り、雨や雪を凌げる大きな軒下ピロティ空間を設け、大災害発生時には救援車両を乗り入れて、被災者のトリアージや救援活動用のスペースとしても有効に活用できます。



平川の風景に囲まれた緩やかなランドフォーム ~市民と共に、市民が育む、新世代のシティホールを創る~

01 周辺環境と呼应し、人の回遊をもたらす敷地利用計画

周辺の公共施設や金融機関、診療所等を訪れる人々を含めて、人と車の流れを考慮し、この敷地を、駅前商店街とも連携した賑わいの創出に寄与する市民の活動の場として捉えます。敷地北西の交差点を起点とした「ねぶた広場」を設け、単に市役所を訪れるだけでなく、外から平川市を訪れる人々にとっての、まち歩きの出発点となる場所をつくります。また、中央公園の緑と連続した緑のネットワークを整備し、美しい生垣の大刈り込みと共に、市民の目や心のやすらぐ憩いの広場を創出します。



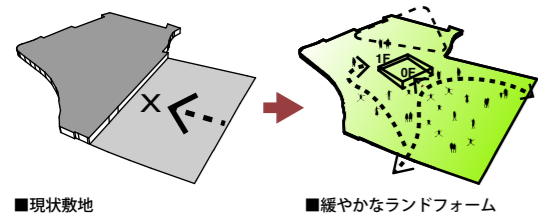
健康センターとねぶた展示館



世界一の扇ねぶた

02 不定形で段差のある敷地を、一体的に「滑らかに」整備する

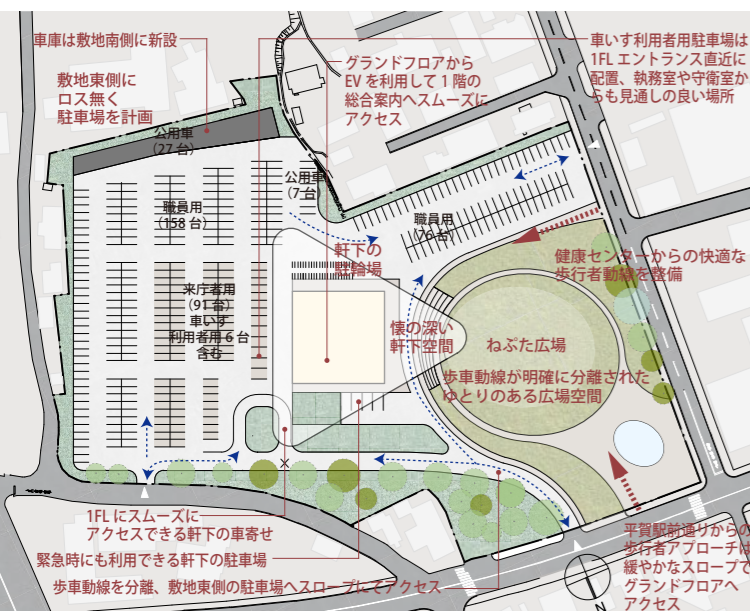
大きく2つのレベルに分断された現状敷地に対し、敷地西側から東側へ緩やかにつながる、段差の擁壁を用いないランドフォームを計画します。看板となる「生垣」やスロープが高低差を緩やかにつなぎ、通常であれば断絶しがちな高低差のある造成計画ではなく、サイトデザインを流動的なひと続きのものとして整備することで環境的にも景観的にも連続感のある広がりをもたらします。



約2%の勾配で敷地全体をつなぐ段差のない「緩やかなランドフォーム」は、子どもからお年寄りまで、全ての人に優しい場所を提供します。車両通行にとっても、回遊性をもつ敷地となることで安全且つ利便性の高い場所となります。

03 市民が利用する有効な外部空間を最大限に確保する、無駄のない配置計画

接地するロビー階の形状を駐車場配置と整合させて計画し、コンパクトでロスがなく、利用者が車を止めやすい駐車場レイアウトを実現します。敷地北西側にゆとりのある空地を設け、歩行者動線と車両動線を明確に分離し、安全・安心かつ快適な外部空間を実現します。「ねぶた広場」に面した懐の深い軒下空間を設けることで、雨や雪の影響を受けない快適なアプローチ、半屋外の市民活動の場をつくります。夏には日差しを除けた観覧・休憩スペースとしても利用可能で、四季を通じて人々が集まり、様々な交流のきっかけを誘発する場となります。



配置イメージ図 S=1/2500



外観イメージ図2



1階の総合案内からランドフロア越しに見える「ねぶた広場」

「人が交流し行き交うことから生まれる賑わいの創出」についての提案(1)

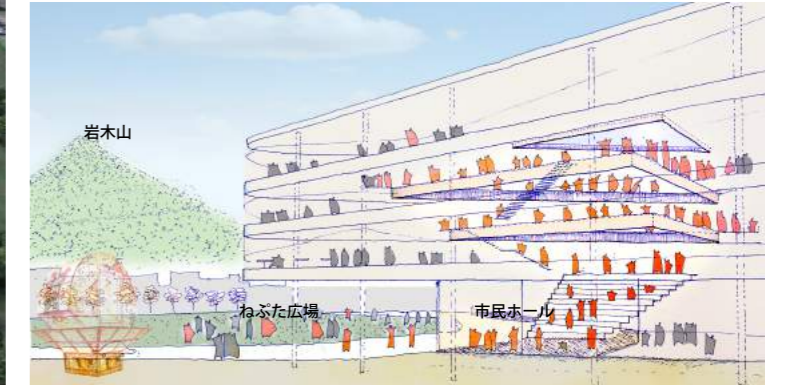
04 ランドフロアは広場につながる市民活動に開かれたフロア

広場に接続する市民ホールのフロアを「ランドフロア」と呼び、駐車場側に接続する上階の市役所ロビー階を「ファーストフロア」と呼んで、建物に2つの接地階を計画します。このうち下階のランドフロアは、屋外の広場、半屋外の軒下空間とも一体利用でき、様々な市民活動に開かれたフロアとなります。市役所機能とは明快にセキュリティ分離することができ、休日夜間などにも積極的な利用で多様な賑わいが生まれ、まちにも広がって行きます。

「人が交流し行き交うことから生まれる賑わいの創出」についての提案(2)

05 広場と市民ホール、庁舎の各階を繋ぐ「重層ボイド空間」

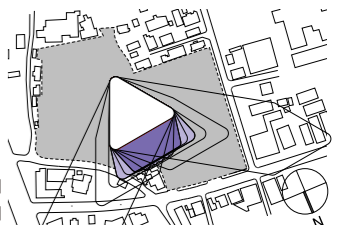
各階平面の中央に、優しい光に包まれた吹抜け空間を設け、庁舎内全体の視認性を高めるとともに、様々な賑わい広がる市民活動のつながりを生み、日常的な賑わいを実感できる空間を創出します。この「重層ボイド空間」自体が、屋根のかかった「市民の広場」となり、特に夏場の暑い盛りや、津軽の長い冬の期間にも、大いなる市民交流の舞台となります。舞台は屋内だけでなく、大きな軒下空間を介して敷地北西側の緑豊かな「ねぶた広場」とも連続し、敷地全体、さらには商店街全体にも広がり、屋内外の賑わいを連鎖させます。



「重層ボイド」が内外の賑わいを繋ぎます

06 近隣や周辺への影響を最小限に抑える、建物シルエットのデザイン

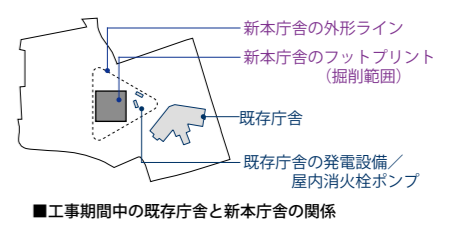
3階建て三角形平面のシルエットは、建物東西側の日影を減らすほか、景観的にも圧迫感が抑えられます。また冬場の駐車場にも殆ど日影を落とさないで、融雪を促します。



建物形状による日影検討

07 既存庁舎を休まず使用し、仮設を利用しない建て替え計画

配置計画上は、既存の発電設備等が重なりますが、これらの既存機器は全て大きな軒下部分にあり、施工中は構台を差し掛けることで、工事中もそのまま稼働を続けられ、仮設を必要としません。



工事期間中の既存庁舎と新本庁舎の関係

08 切土と盛土を平衡させ、残土を排出しない造成計画

工事に発生する根切り残土は、敷地全体をワンスロープ化する緩やかな傾斜造成の中で、全て場内処分が可能です。もともと接地階のフットプリント(面積)が小さく、根切り量そのものも大幅に抑えられています。

基礎躯体の掘削	4,800m ³	東側駐車場	5,000m ³
造成による掘削	400m ³	進入路造成	600m ³
合計	5,200m ³	合計	5,600m ³

切土数量(概算) 盛土数量(概算)

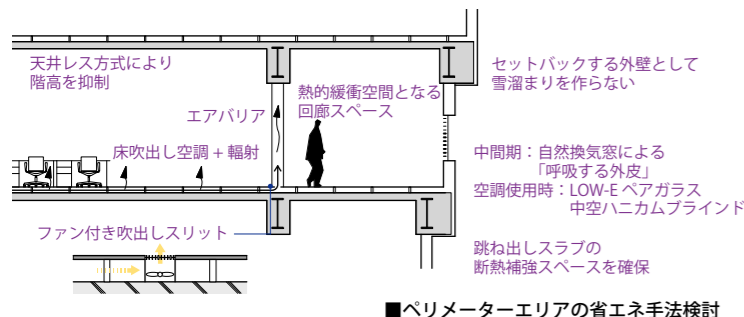
内観イメージ図3

更新・進化する環境建築を実現する、しなやかな構造システム ~市民と共に、市民が育む、新世代のシティホールを創る~

01 建築・構造・設備を融合し、建築の形態を活かした環境負荷低減

季節ごとの卓越風を考慮した平面形状と開口部の配置、バランス式自然換気窓等の設置により、建築に「呼吸する外皮」をつくり、心地よい風が通り抜ける爽やかな室内環境をつくります。重層する吹抜けが有効な重力換気を誘引するほか、吹抜けを介した柔らかな自然光も内部空間に降り注ぎ、建築の人工照明を最小化することができます。

平面形を単純なものとすることで相対的にペリメータの割合を減らし、かつ窓廻りの断熱性能を高めて執務空間周囲に熱的緩衝帯としての回廊部分をつくることで、建築全体の冷暖房負荷を大幅に低減し、ランニングコストを抑えます。



「約30年毎に到来する大規模改修時のコスト削減」についての提案

02 将来の更新を見据えた、スケルトンとインフラのシステム

免震構造により、地震時の市役所のBCP対応を図ると共に、建物自体を長寿命化し、耐震壁等による制約の少ないプランとして、大胆な間仕切り改修等にも柔軟に対応できる建築とします。設備コアを適度に分散配置し、段階的な設備改修が行える計画とし、複数の熱源を持つハイブリッド空調システムにより、大規模改修時にも庁舎機能への影響を最小限にとどめます。

天井レス方式や床吹出し空調方式を採用し、設備工事に伴う無駄な道連れ工事を発生させないようにする他、屋上機器の改修時に防水改修も同時に行えるようにすることで、大規模改修工事の頻度そのものを減らす工夫をします。

「超長期にわたるライフサイクルコスト低減への工夫」についての提案

03 日々のメンテナンスが容易で、長期的に合理的な維持管理ができる建築

業務空間の大部分に、地震時の安全性も高い天井レス方式を採用することでメンテナンスを不要とし、階高が抑えられて建設費も削減されます。

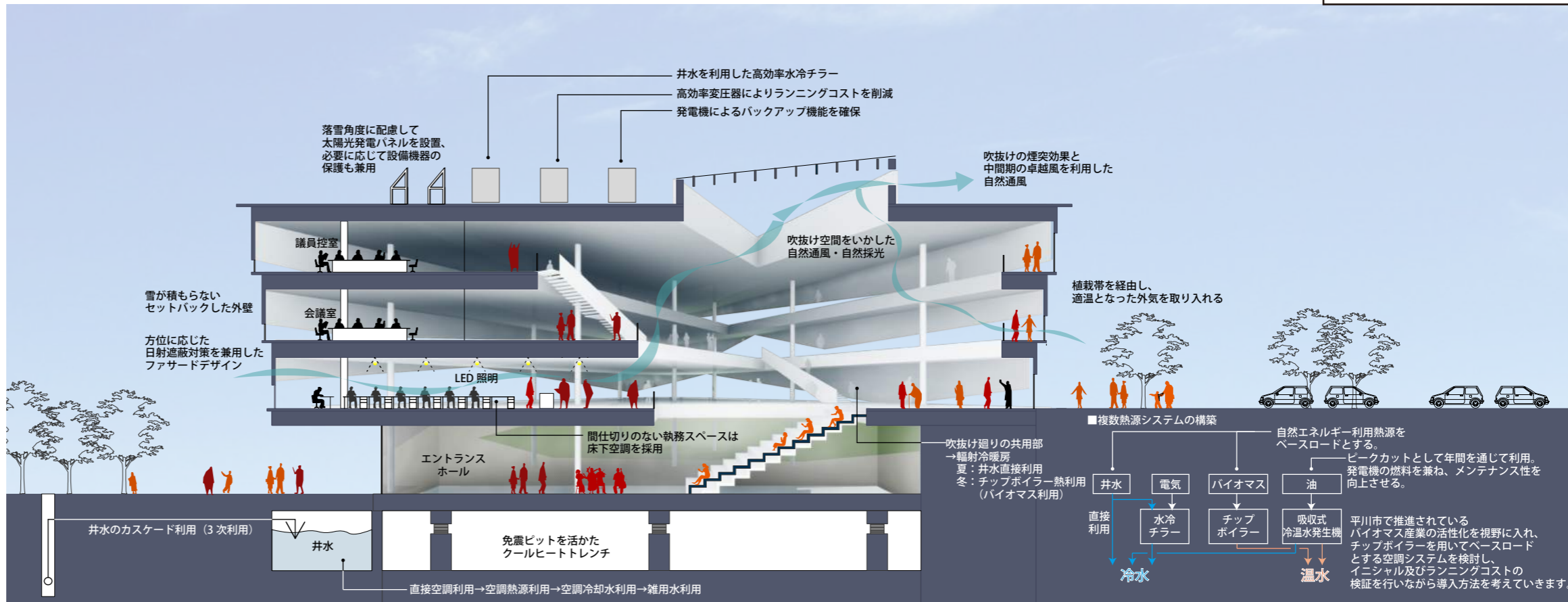
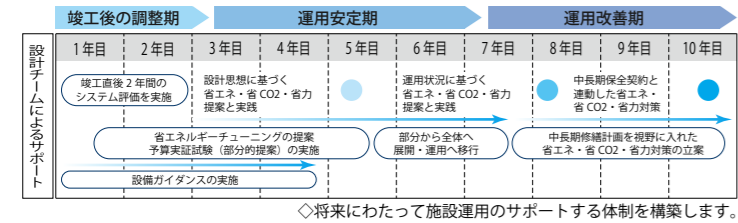
間仕切りのないスペースは床吹出し空調+輻射冷暖房の併用方式とし、省エネでかつ、底冷え感や気流による不快感の無い快適な空調システムを構築し、配管更新工事等を必要としない長期的にみて合理的な設備方式とします。

全般にメンテナンスが容易な材料を選定し、日常的な清掃のし易さや大規模改修の頻度を下げて、ライフサイクルコストを低減します。

「超長期にわたるライフサイクルコスト低減への工夫」についての提案

04 運用・維持管理でのLCC低減をサポートする設計体制と設備システム

ただ単にBEMSを導入するのではなく、平川市庁舎の特性にあわせてカスタマイズし、利用状況に応じてシステムを育てていくことができる「H(平川)-BEMS」を構築します。「H(平川)-BEMS」のデータ分析に設計者が関わり、運用管理者に各種アドバイスが可能な体制を構築します。

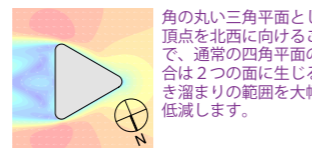


「②特別豪雪地帯における雪及び凍害対策」についての提案

05 津軽の冬を快適に過ごす「雪氷に強い雪国庁舎」

この土地の特に冬場の季節風を考慮し、吹き溜まりが生じにくい、万全な雪庇・凍害対策を施した雪国の環境と共生する建物形態を考えます。雪庇は「樹受け+ドレンキャップ」により凍結を防止することで、ドレンヒーターを設けずランニングコストに配慮します。また、敷地内通路、駐車場等について、無散水消雪・散水消雪・機械除雪を効果的・経済的に組み合わせ、来庁者の利便性を確保しつつ、ランニングコストを極力抑える庁舎建築、および外構の計画を行います。

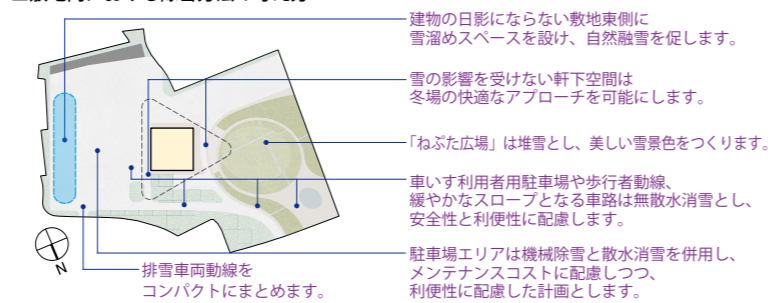
■吹き溜まりの生じにくい建物形状



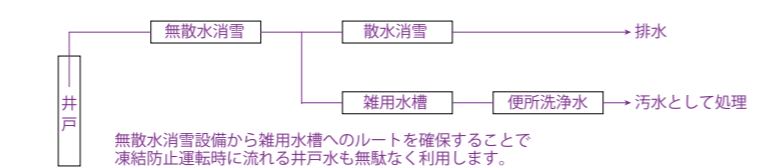
■雪庇を作らない「風の抜ける笠木」

東北地方での施工実績がある「風の抜ける笠木」のディテールを参考に、雪庇をつくらぬ屋根形状を検討します。

■敷地内における除雪方法の考え方



■井戸水を無駄なく使う消雪システムの構築



「③省エネルギー、再生可能エネルギーの導入を図るための工夫」についての提案 (1)

06 自然光や豊富な地下水等、自然の恵みを最大限利用

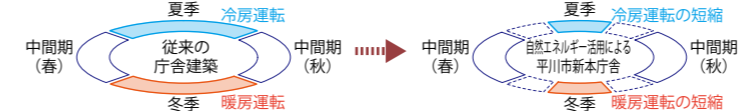
全般に省エネ・再生可能エネルギーの導入を図り、地中熱を活用した熱源・空調を提案します。中央の吹抜けを介した自然光や自然通風と合わせて、窓から遠い中央執務エリアの室内環境を向上させます。自然利用によるエネルギー源として、太陽光発電パネルやチップボイラーによるバイオマス利用、年間を通じた地下水の3次利用などを検討します。

「③省エネルギー、再生可能エネルギーの導入を図るための工夫」についての提案 (2)

07 自然エネルギー活用による空調運転期間の最小限化と災害時対策

建築の断面計画、適切な日射遮蔽、外気冷房や自然通風、断熱強化等により、機械による空調運転期間を大幅に短縮し、中間期を延伸します。これらの工夫は災害等による停電時にも良好な室内環境確保に寄与します。

熱源設備は複数を組み合わせて構築し、リスク分散を図ります。雨水や井戸水再利用の雑用水槽による水源確保により、生垣等の植栽管理のほか、災害時のトイレ洗浄水にも対応します。



「③省エネルギー、再生可能エネルギーの導入を図るための工夫」についての提案 (3)

08 将来の技術動向を踏まえ、段階的にZEB化を推進

設計段階で、太陽光発電の拡張、最先端機器への更新等、技術革新への対応方法を総合的に検証し、段階的にZEB化を図るためのロードマップを提示します。

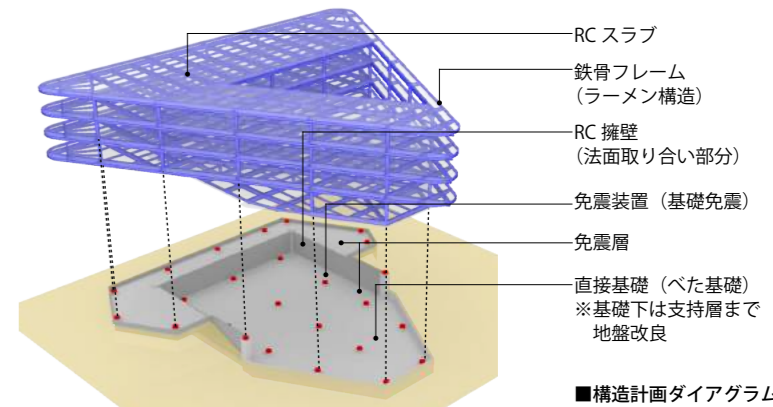
「③省エネルギー、再生可能エネルギーの導入を図るための工夫」についての提案 (4)

09 総合的な性能評価/将来にわたって市民の誇りとなる庁舎に

建築環境総合性能評価システム(CASBEE)などを用いて環境品質に配慮した施設とし、末長く将来にわたって市民の皆さんに愛され続ける庁舎を目指します。

10 内部のフレキシビリティと、防災拠点としての安全性を確保する構造計画

接地階のフットプリントを最小化する効率的な基礎免震構造により、相対的に掘削土を低減するなどコストパフォーマンスの高い形式とします。ロングスパンの鉄骨ラーメン構造を採用することで、内部空間のフレキシビリティを高めるとともに免震装置の台数を減らし、イニシャルコストや点検等のメンテナンスコストの削減を図ります。



11 土質の特徴を考慮した基礎形式

鉄骨構造を採用することで建物全体を軽量化し、杭を用いず「地盤改良+直接基礎」の形式の実現を図り、イニシャルコストを大幅に削減します。

敷地全体の利活用を考慮した建物配置は、既存杭との干渉も極力少ないものとなっており、直接基礎の採用とあわせ、既存杭の撤去を最小限にとどめて解体工事にかかるコストを削減します。

